

# KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

在日ラティーンと日本人の接点：  
アンケート調査による在日ラティーン受け入れにつ  
いての考察

メタデータ	言語: jpn 出版者: 関西外国語大学 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山森, 靖人 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学短期大学部
URL	<a href="https://kansai.gaidai.repo.nii.ac.jp/records/5749">https://kansai.gaidai.repo.nii.ac.jp/records/5749</a>

## 在日ラティーノと日本人の接点

—アンケート調査による在日ラティーノ受け入れについての考察—

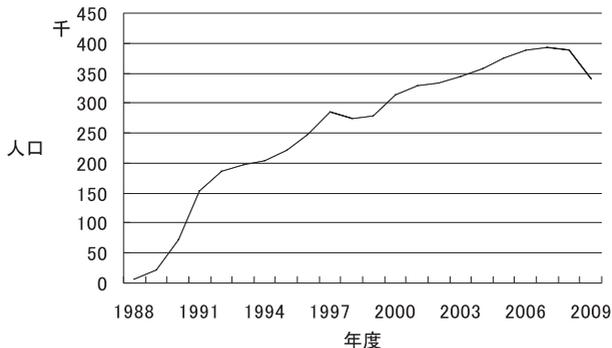
山森 靖人

### 0. はじめに

1980年代末頃より、日系ブラジル人を中心としたラティーノの来日が急増した<sup>1</sup>。当初、彼らの来日は出稼ぎを目的とした数年単位のものであったが、やがてその滞日期間は長期化する。

バブル景気の終焉、さらには世界不況に伴う近年の日本の景気後退は、在日ラティーノの雇用環境を急激に悪化させた。しかし、それにもかかわらず、彼らの人口が急減することはなく、日本定住化の傾向は続いている（グラフ1）。

グラフ1 南米出身外国人登録者数の推移<sup>2</sup>



日本に定住化した在日ラティーノが、日本の地域社会といかなる関係を築いているのか、また、日本の地域社会が、彼らをどのように認識し、受け入れているのか、これらの現状を把握するため、2006年より2010年までの5年間、主に大学生を調査対象者として、日本人の目に映る在日ラティーノのイメージを問うアンケートを実施してきた<sup>3</sup>。

本稿ではそのアンケート結果を通して、日本人と在日ラティーノが交流する接点、及び、日本人が有する在日ラティーノに関する見識やイメージを紹介する。

「顔の見えない」と形容される在日ラティーノと、彼らを受け入れる日本の地域社会が抱える問題点を考察してみたい<sup>4</sup>。

なお、アンケートの全回答者が日本人と断定できない点についてお断りしておきたい。回答者には在日韓国・朝鮮人や在日中国人なども含まれているが、回答者自身の国籍については問わなかったため、本稿では便宜上、日本人と表記する。

## 1. 在日ラティーノと日本人の接点

アンケートは主に関西在住の大学生を対象として実施した<sup>5</sup>。在日ラティーノについての知識や意識を知ることが目的として、「在日ラティーノの友人や知人がいるか」と「在日ラティーノについての知識やイメージはどのようなものか」の2点についての情報収集に努めた。

在日ラティーノの友人や知人の有無については、全回答者955人の約16%にあたる151人が「いる（または、いた）」と回答した<sup>6</sup>。さらに、全回答者の約88%（844人）が、在日ラティーノに関する知識やイメージを問う設問に対して、具体的なコメントを寄せてくれた。

回答者からの具体的なコメントの紹介を通して、「普通の日本人」が在日ラティーノについてどのようなことを知っており、また、いかなるイメージを抱いているのか、さらには、日本人と在日ラティーノとの関わりがどのように進展しているのかを探してみたい。

まず、彼らと交流体験を持つ回答者から寄せられたコメントをいくつか紹介する。

コメント1) 地元の広島県呉市に住んでいました。今は帰ったらいいです。小学校から中学校まで一緒でした。各学年に3～4人がいて、日本語学級というのもありました。ペルー人やブラジル人です。日本語はだいたいペラペラです。出稼

ぎに来てました。地元にはブラジル人がやっているレストランもあり、肉がおいしかった。(2006年)<sup>7</sup>

コメント2) 小学校2年生の時、パラグアイから女の子が転校してきました。父が日本人で母がパラグアイ人です。兄と姉がいて、みんなスペイン語を話していました。私の同級生の子だけ、半年後くらいから日本語がペラペラになりました。小学校6年生の時には、ブラジルから女の子が転校してきました。妹は4年生でした。ブラジルから来た子とパラグアイの子は、よくポルトガル語(?)で会話していました。三重でのことです。(2006年)

コメント3) 高校の時の友達で小学校5年生の時にペルーから日本へ引っ越してきてからずっと日本にいる子がいた。両親はペルー人だけど、その子のお母さんが日本人とペルー人のハーフで、その子のおじいちゃん(日本人)が九州にいるらしい。日本語はペラペラだった。家族とは主にスペイン語で話していたらしい。(2007年)

コメント4) その知人とは小学校6年間ずっと同級生でした。彼とは小学校の時に知り合い、中学校まで家が近所同士でした。母がブラジル人、父が日本人とのハーフで、彼自身は5歳までブラジルに住んでいたとのこと。年齢は同じ年(19歳)。学生をしている。3人家族です。日本語はペラペラです。(2007年)

コメント5) ブラジル出身の友達がたくさんいます(日系ブラジル人)。日本の学校に通ってた人以外はあまり日本語は話せないと思います。友達の多くは親の仕事の都合で日本に来ています。私の地元、静岡にはこのような人たちがたくさんいるので、ブラジルのレストランや学校、ポルトガル語の看板などがあります。そんな状況だから、日本語が上手なくても他県より生活に苦労しないのではないのでしょうか。(2008年)

コメント6) 約6年前に長野県茅野市で通っていた中学校でクラスメイトとして知り合った。ブラジル出身。女性。家族は親兄弟がいたようです。ブラジル人の

共同住宅に住んでいました。その子自身は日本語を話せましたが、その子の親はあまり話せなかったようです。(2008年)

コメント7) 小学校と中学校が一緒でした。滋賀県大津市に住んでいました。出身はペルー。私の同い年。お姉さんが2人と両親の5人家族。日本語はあまり話せなかった。両親は工場で働いていて、お姉さん2人はペルーでモデルをやっていて、その子もモデルになると言っていました。(2009年)

コメント8) 友達のお母さんがブラジル人です。滋賀県に在住で、日本語は話せます。(2010年)

これらのコメントから、在日ラティーノが多く住む地域において、教育機関(小中高校)が、日本人(の児童)と在日ラティーノ(の児童)が接触する場となっていることがわかる。

子どもの頃から彼らと交流を持った回答者の多くは、在日ラティーノについての知識をかなり詳細に回答している。例えば、先の長野県茅野市での体験を教えてくれた回答者(コメント6)は、次のようなコメントで、在日ラティーノの児童が抱える問題点までをも指摘する。

コメント9) 家族で日本に来ると、子供の多くは公立の学校へ通うが、その子たちはなかなか日本の学校に馴染めない。祖国と日本の学校制度の差が大きく、また、日本語がまったく分からない子にとって、日本の学校の受け入れ態勢が十分ではないためではないのかと思いました。私の母が公立中学校で外国籍の生徒を教える「日本語学級」の担当教員をしています。母は日本語以外ほとんど話せません。そんな母が外国籍の子供たちを教えているのは、母の代わりになるような正規の日本語教員がいないからだそうです。私はその話を聞いて、日本政府は外国人を受け入れるだけ受け入れても、その家族、特に子供のケアのことまでは考えていないのだと思いました。(2008年)

この回答者の場合、母親が日本語学級の教員である事情から、在日ラティー

ノが抱える問題点をかなり詳しく理解している。

本回答者と同様に、彼らの「集住地」での生活体験を持つ他の回答者たちも、在日ラティーノに関するかなり具体的なイメージをコメントしており、次に見るように、彼らの正負両側面の姿やイメージを実体験としてとらえている。

コメント10) とても陽気。でも夜でも騒いでたりしてうるさい時もある。地元で犯罪などもあり、あまりよくない一面もある。(2006年)

コメント11) 貧しいと思います。小学校の時に日本に来ていた男の子の家族も出稼ぎに来ていたし、その子自身も夏休みが過ぎた頃から父親と一緒に働いていました。お姉さんも働いていたみたいです。でも彼はすごく明るくてフレンドリーでガンバリ屋さんでした。水泳が全然できなかつたけど、練習して10mくらい泳いでいました。顔もかっこよくて、運動神経もよかったです。いつも笑っていて、よく女の子に「かわいい」と言ったりする、よい人でした。ほめ上手やなって思いました。表現が上手だと思います。(2006年)

コメント12) 自己中心的。嘘つき。自己表現がすごい。声がでかい。麦茶に砂糖を入れて甘くする。運動神経が良い。スタイルは良いが、おばちゃんは太っている。なんか憎めない。愛嬌がある。向上心が高い。意外に情にもろい。すぐ泣く。私の地元は、ペルー人が女の子を殺してダンボールに入れて放置するという事件があった街の近くです。私たちはふざけて差別して、「ブラジル人がやったんじゃないか？」と疑っていました。それが現実になって、すごく悲しかったです。知人の南米人もすごく悲しそうでした。(2006年)

コメント13) 出稼ぎに来ている人や、日系ブラジル人の子供などが同じ学校に通ったり、近所に多く住んでいた。そのため、私にとって外国人の8割はラテンアメリカ人です。いつも安売りの店にいて、陽気に自転車で集団移動しているイメージです。逆に枚方に来てラテン系の人がほとんどいないのに驚きました。私の出身は静岡の浜松です。(2007年)

コメント14) 私の出身地は岐阜県美濃加茂市ですが、そこには日本でもブラジル人がとても多い市です。スーパーに行ってもブラジル人ばかりですし、学校でもブラジル人児童の方が多いです。ブラジル人の多くはソニーで雇われています。ブラジル人ばかりが住んでいるアパートも数多くあります。ブラジル人学校もあります。でも、そのすべてが私立です。お金を稼ぎに日本に来ているので私立に通い続ける子は少ないみたいです。だから公立の学校に行くけど、完全に馴染めていないとは思えませんでした。市はサッカーを通じて交流したり、ブラジルを理解しようとしています。日本語を話せないブラジル人も多いです。この流れをどこかで変えないといけないと思う。また、何か事件などが起きたらすぐに「ブラジル人の仕業か？」と疑われています。私たち自身の先入観もしっかり見直すべきだと思う。(2008年)

コメント15) 私の地元の近くにはブラジル人がたくさんいました。彼らのほとんどが貧しいから出稼ぎに来ているというイメージを持っていました。しかし、私にはラテンアメリカ出身の友人が3人いるのですが、彼らは高校に進学し、1人は大学にも通っています。彼らは日本人と同じ生活をしています。日本での名前も持っています。1人は日系ブラジル人とは思えない位、日本人みたいな顔をしています。彼らはごくたまにわからない語があるくらいで、ほとんど難なく日本語で会話しています。すごいと思います。(2008年)

コメント16) 私の出身地の富山には、出稼ぎに日本にきているブラジル人が多くいた。彼らは主にボロアパートに住んでいたため、彼らに対しては「貧しい」というイメージが強かった。小学校に来ていた子供たちは、あまりまわりに馴染んでいないようだったし、日本語が理解できなくて苦しんでいるようだった。(2008年)

静岡県や三重県、滋賀県などの小中高校で在日ラティーノの子どもたちと交流を持った体験談は、ここで紹介した以外にもたくさんもらった。その一方、アンケート回答者の出身地として最も多いであろう大阪や京都などの小中高校において、彼らと交流を持ったと語る体験談は見られない。

在日ラティーノが「集住」していない地域に暮らす回答者、すなわち、全回答者の80%を超える「在日ラティーノの友人・知人を持たない」と回答した回答者たちは、彼らの存在を身近に感じることはなく、彼らの存在をまったく知らないケースさえ見られる。

コメント17) 日本に多くの中南米人が住んでいるイメージはありません。私知っている中南米人はオラルルの先生だけです。(2006年)

コメント18) 在日外国人については、朝鮮人とかしか思い浮かんでこないし、在日ラテンアメリカ人について聞かれたのは初めてで、今まで全然意識したことなかったのでイメージはないです。(2007年)

コメント19) 在米ヒスパニックなら少しわかるけど、在日のイメージはあまりないです。(2007年)

コメント20) 今まで日本に住むラテンアメリカ出身者のことを考えたことがありません。でも、文化も言葉も違う国で過ごすのは大変じゃないかと思います。(2009年)

コメント21) みんな陽気なイメージ。ラテンアメリカ出身の人とほとんど関わりがないので、よくわかりません。(2009年)

コメント22) ラテンアメリカ出身者に出会ったこともないので、どれくらいの方が住んでいるのかまったく想像がつかないです。(2010年)

小中高校時代に在日ラティーノとの接点を持たなかった回答者であっても、大学で彼らと知り合い、彼らの存在を意識する契機となったとするコメントも見られた。大学のクラスメイトとして、彼らと知り合う接点が存在する。

コメント23) 大学に入ってから、友人を通して知り合いました。明石に住んでいます。ペルー人の男性です。20歳の学生で、小学校6年生の時から日本にいます。日本語はぺらぺらです。スペイン語も話します。(2006年)

コメント24) スペイン語Iのクラスメイトがブラジル出身です。日本語とポルトガル語を話せるようです。静岡県の富士山のふもとに住んでいましたが、外大に通うため今は枚方に住んでいます。(2007年)

コメント25) 昨年、堺市の小学校にインターンで行った。その学校の南米(ペルー、ブラジル)人クラスにはペルー人7人とブラジル人6人がいた。そのうち4人が今年から中学校に入学したが、まだ日本語を話せない子がいる。これから進級は出来ても、学力をきちんとつけられるのか、また、もし母国に戻るとして年相応の母語を身につけていられるのか、そんな疑問を持っている。それに、日本で生活している彼らの家族は支援を受けられているのか気になる。(2007年)

これらはすべて関西外国語大学での体験談であるが、大学で在日ラティーノの学生と知り合いになったというコメントは、ほかにも複数寄せられていた。また、最後のコメント(コメント25)に見られるように、教職等の学習活動を通して、彼らの存在と彼らが抱える問題に直面する学生も存在する。さらには、大学に在籍する回答者自身が在日ラティーノである、あるいは近親者に在日ラティーノがいるとコメントする回答者も少数ではあるが見られた。

コメント26) 母がブラジル出身です。日系ブラジル人は、日本語が話せても読み書きができず、漢字で自分の名前や住所が書けない。ブラジル人が犯罪を犯したなどのニュースを聞いて、日系ブラジル人は悪い人ばかりだと思ふ日本人がいるが、悪くない日系ブラジル人にとっては迷惑。日系人は外見は日本人と同じなので、「日本語が書けない」と日本人に伝ええるのは恥ずかしいと思ふ人もいます。それに、それを伝えても職場などでは普通の日本人並みの語学力を求められることがあってストレスになる。出稼ぎで日本に来るが、帰国するまで残してきた

家族のことが不安。それ以前に日本でやっていけるか不安。一度日本に来たらまた日本に来たいと思う。でもお金が無くて来られず、残念がる人がいる。(2010年)

回答者から寄せられたコメントを見る限り、日本人の在日ラティーノに対する認識は両極化しているように思われる。

在日ラティーノと直接的な交流を持ったことのある回答者は、彼らとの交流を通して、彼らに関するかなり詳細な情報を知っており、正負両面である場合が多いが、彼らに対するより具体的なイメージを抱いている。

一方、彼らと直接交流を持たない大多数(80%以上)の回答者たちは、在日ラティーノに対して、極めてステレオタイプ的なイメージしか抱いていないことがみてとれる。

## 2. マスメディアが伝える在日ラティーノ

在日ラティーノと直接的な交流を持たなくとも、テレビや雑誌などのマスメディアが発信する情報によって、彼らの存在を知ることができる。回答者の多くが、マスメディアからの情報によって知りえた在日ラティーノに関する知識や、報道から感じた彼らに対するイメージをコメントしている。

コメント27) 以前、テレビで在日中南米人のドキュメントを放送していて、皆ひっそりと、貧しいまではいかないけれど小さめの家に住み、工場で働いていました。その人達の子も達がみんな「日本人が嫌いだ」と言っていて、少しショックでした。その理由も「なんとなく」というもので、外国人と仲良くしたいと思っている日本人もいっぱいいるのに、良い印象を持たれていないと知って悲しかったです。(2006年)

コメント28) 身近に中南米出身者がおらず、テレビの報道で入ってくる情報は良くないものばかりなので、良い印象は持っておりません。地理にも疎いので中南米がどの地域なのかもわかりません。真っ先に頭に思い浮かんだのは、先日、幼女が在日南米人に殺されたあの事件でした。日本に来る人達が皆そのような人ばかりだとは思いたくないので、これから何らかの機会で中南米に関する見識を広

めていけたらいいと思います。(2006年)

コメント29) あるテレビ番組のドキュメンタリーで、日本にお金を稼ぐためにやってきたペルー人を見たけど、その人は工場で働いていて、寝る時間も少ないのに、給料は少ないと言っていました。日本にやって来たのはいいけれど、言葉もあまりわからないから、雇ってもらえる仕事も限られてくるらしいです。そういうことを聞くと、厳しい現実だなと感じました。(2008年)

コメント30) 女の子を殺害したカルロス・ヤギさんのように、日本に慣れず、一人で問題を抱え込んでしまい、犯罪を犯してしまう中南米人が少なくないとニュースで聞きました。私の中南米人に対するイメージは、陽気で優しく、大胆で、時間にルーズだというものです。本来は明るくて楽しい人が多いと思うし、私は中南米人が好きなので、もっと外国人を受け入れる態勢や、ふれ合いの機会があればいいと思います。(2006年)

コメント31) ブラジル人やメキシコ人は、よく日本でコンビニ強盗などをしているイメージがある。ニュースでも「ブラジル人が…」などとよく聞きます。日本は比較的治安がいいこともあるが、中南米の人は危ないというイメージです。(2006年)

コメント32) ラテンアメリカ出身の人はとても気さくに話せるというイメージを持っていたが、数年前に起きた広島で幼児が殺害された事件で、私の実家のすぐ近くで犯人が逮捕された。外国人の犯罪が一気に身近になった気がします。「ラテンアメリカ出身＝ファン・カルロス」ではないけれど、全く関係のない外国人でも、怖いなど当時は思っていました。(2007年)

コメント33) 南米出身の人というとチリ人のアニータ・アルバラードさんを思い出します。他にも犯罪を犯した人が何人かいたように思います。でも、南米人はとても陽気なイメージがあるので、親しくなってみたいという気もします。(2007年)

コメント34) 私の地元ではブラジルやアルゼンチンの人々が集まって暮らしていて、近寄りがたかったです。実際に触れ合うととても陽気ですが、彼らに対して悪いイメージを持っている人が多いのではないのでしょうか。たとえば、数年前にペルー人が少女を殺害したニュースなどが原因で。私も少なからず悪いイメージを持っています。(2007年)

コメント35) 私が大好きなサッカー選手に日系ブラジル人の選手がいる。その選手はすごく神を信じている。あと、中南米人と聞くと、昨年頃にニュースになったペルー人の男性が幼女を殺害し、ダンボールに入れ放置したことを思い出す。少し怖いイメージもある。でも、家族のために出稼ぎに来て、一生懸命働いているというイメージもある。教科書で習ったり、そのサッカー選手も言っていたが、時間にルーズらしい。あと、アメリカ人の先生が発展途上国に行った時の話をしてくれた時に、南米の人々は裕福な家庭ほど外部の人間を入れたがらず、貧しい家庭ほど温かくて親切な人が多いと言っていた。でも、すべてがそういうわけではない。あと、イメージ的にスポーツ万能という感じがする。(2006年)

コメント36) 東京に日系ペルー人のギャングがいると週刊誌で読んだことがあります。なぜ来日したのかはわかりませんが、何か怖いイメージがあります。(2007年)

これらのコメントを見る限り、マスメディアを通して伝えられる在日ラティーノの姿は、「貧しさ」や「犯罪」と結び付けられていることがわかる。もちろん、彼らが経済的に困窮していることや彼らが犯した犯罪は報道されるべきであろう。しかし、マスメディアが伝える彼らの情報は、彼らの「貧しさ」や「犯罪」を伝えることに偏向し過ぎているようである。

この点について、イシはマスメディアが日系ブラジル人を取り上げる時、そこには常に「犯罪」というキーワードがつきまとうことを指摘し、マスメディアがどのようにマイノリティを紹介するかが、そのマイノリティに対する評価を決定づけている点を指摘している（イシほか 54）。

上記のコメント（コメント27～36）からも、マスメディアの偏向した報道姿

勢は、在日ラティーノの真の姿を伝えるものではなく、彼らのステレオタイプのイメージ、しかもマイナスなイメージを定着させる役割しか果たしていないことが読み取れるだろう。

しかし、日本のマスメディアの偏向報道は、在日ラティーノの側からの情報発信が極めて少なかった点にも原因がある。

出稼ぎとして来日し、日本滞在が一時的なものと考えていた彼らは、日本の地域社会に対して、積極的に自らの存在をアピールする必要性を感じていなかったようである。むしろ、日本語を使う必要のない、いわゆる「3K」の仕事に就いた彼らは、日本人へ情報発信するための日本語能力や時間的余裕を獲得することができなかつた言うべきかもしれない。

来日の主目的が出稼ぎであったことは、在日ラティーノが主体となり、日本の地域社会に対して発言力を持った組織を築く機会を逸する要因でもあった。

彼らは、日本において、衛星テレビ放送やFMラジオ放送、新聞や雑誌、フリーペーパー、インターネットなどのメディアを通して情報を発信し続けている<sup>8</sup>。しかし、それらポルトガル語やスペイン語で発信される情報は、日本人が彼らの存在を知るための情報にはなり得ず、単に在日ラティーノへ向けた情報、すなわち職探しや必要最低限の日本の情報、あるいは慣れ親しんだ言語での娯楽を提供する機能しか有してこなかった。

在日ラティーノ同士を繋ぐ情報ネットワークは高度に発達しているが、その情報ネットワークは、日本のマスメディアとリンクしたものではない<sup>9</sup>。双方からのアプローチがあり、互いのメディアをより強固にリンクできれば、在日ラティーノは、日本で暮らす上での有益な情報を、より多く得ることができるようになるだろう。一方、日本人は在日ラティーノについての「正しい知識」を得ることができるはずである。

なぜ彼らは貧しいのか、なぜ彼らの一部は犯罪に走ってしまうのか、在日ラティーノが置かれた状況を詳しく知ることができるような報道、さらには日本人が、彼らの「陽」の側面について知ることのできるような情報発信が望まれる。

### 3. 在日ラティーン受け入れの現状

アンケートに寄せられたコメントから、日本人と在日ラティーンとの接点や交流は極めて限定的であることがわかる。

まず、その要因として、彼らが特定の地域に集中して居住している点を指摘することができる。在日ラティーンと直接的な交流を持ったことがあると答えたアンケート回答者は、全体の約16%に過ぎず、その多くは特定の地域に集中している。

一方、在日ラティーンが多く住む地域においても、彼らと日本人の交流が活発なわけではない。彼らの「集住地」の現状について、研究者たちは次のように記している。

隣人であるブラジル人の行動に対応できない場合、日本人家庭は距離をおいた行動をとり、両者の関係や挨拶にぎこちなさが表れる（川村 147）。

容易にコミュニケーションのとれるブラジル人同士でかたまり、あえて日本人とコミュニケーションをとらなくても済んでしまうという現実もある（川村 148）。

Por otro lado, según un estudio realizado por la municipalidad de Hamamatsu en 1993, 1/3 de los habitantes de dicha ciudad han contestado que saben que hay nikkeis brasileños en su vecindad. Sin embargo, nadie tiene contacto ni interrelación con ellos y, lo que es crítico, muchos creen que no podrán convivir con ellos. (一方、浜松市が1993年に実施した調査によると、浜松市民の三分の一が日系ブラジル人の存在を認知しているが、彼らとの交流はなく、多くの者が彼らと共生はできないだろうと考えている。筆者訳) (Tajima 514)。

アンケート回答者のコメントからも、彼らが日本の地域社会で孤立し、経済的に困窮した生活を送っている事実、居住する地域社会において何らかの事件が発生した際、真っ先に「犯人」として噂される、「危険な存在」として認識されている事実が浮かび上がる。

コメント37) 彼らは日本にあまり馴染めていないと思います。言語の壁がかなり大きな障害となっているからです。また、私は違いますが、ほとんどの日本人は外国人との接触を嫌がります。だから、地元の大垣市のブラジル人は日本人から孤立していると感じます。日本人がポルトガル語やスペイン語、ラテンアメリカにもっと興味を持ってくればと思います。(2008年)

コメント38) 静岡に多く住んでいるイメージがあります。私のおばが住む掛川に遊びに行ったとき、ラテンアメリカ系の人々を見かけました。おばから、彼ら専用のマンションがあること、彼らが住むことができない区域があることを教えてくれました。ちなみに、おばが住んでいる所がラテンアメリカ人(外国人)が住んではいけないと決められた地域らしく、おばは「だからここは安全な場所」と言っていました。彼らのイメージは悪いようです。(2010年)

だが注目すべきことは、直接的な交流を体験したアンケート回答者の多くが、在日ラティーノが抱える負の側面を認識する一方で、彼らをもつ「フレンドリーさ」「陽気さ」「忍耐強さ」「勤勉さ」などの側面も理解している点であろう。

コメント39) 経済面は非常に低水準。一日の食事もままならないほど貧しい。私の知り合いのブラジル人も、初めてテレビを見たのが14歳、初めてジーパンをはいたのが19歳と語るくらい貧しい。性格的には非常に陽気で社交的な面がある。ハングリー精神は私たちの想像以上のものがある。少々の困難に直面してもへこたれない精神的な強さがある。(2006年)

コメント40) 私の周りには日系人の子や父親が自動車関連の下請け工場で働く為に日本に来たという子がたくさんいた。家が貧しかったり、日本語の読み書きがあまり出来ないせいで、学校の先生から見放されたり、いじめられたりすることが多いように感じました。もちろん、特に問題もなく楽しく学校生活を送っている子もいたけれど、すれた所がなくて良い子ばかりだったので、私は彼らと仲良くなり、日本語を教えてあげたりしていました。2年ほど前に広島で小学校1年

生の女の子を殺した犯人がペルー人でしたが、そのニュースで私の住んでいた地域でラテンアメリカに対するイメージがすごく悪くなってしまったのが残念です。(2007年)

アンケートでは、「在日ラティーノと交流を持ったことがある」とする回答者151人の約61%にあたる92人が、小中高校、または大学などの教育機関において在日ラティーノと交流を持ったことを報告している(表1)。

回答者のほとんどが大学生であるため、在日ラティーノとの接点として必然的に教育機関が報告されることになったとも考えられるが、その点を差し引いても、日本の教育機関が、在日ラティーノと日本人が密接に交流する場として機能していることは明らかであろう。

教育機関で在日ラティーノ(の児童)と交流した日本人(の児童)は、自分自身の体験を通して、ステレオタイプ化されていない彼らの現実の姿を理解しているように思われる。

表1 教育機関での在日ラティーノとの交流を報告したアンケート回答者数<sup>10</sup>

	2006年度	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	計
小学校で	6	9	0	1	0	16 (17.4%)
中学校で	4	8	1	2	1	16 (17.4%)
高校で	3	4	2	2	3	14 (15.2%)
大学で	16	23	4	1	2	46 (50.0%)
計	29	44	7	6	6	92 (100%)

#### 4. まとめ

「貧しさ」や「犯罪」のイメージを植えつけられた在日ラティーノの不幸は、日本政府の場当たり的な方策に元凶がある。

バブル期の労働者不足を解決するため、日本政府は入管法(出入国管理および難民認定法)を改定(1990年6月施行)した。これによって合法的に日本で就労することが可能になった日系人が、主にブラジルやペルーから多数来日する。だが、彼らの労働環境を保全するための法整備が進むことはなかった。

バブルの崩壊は、彼らの雇用情勢を悪化させ、何の後ろ盾も持たない彼らを貧困へと追い込む。さらに、リーマン・ショックが引き起こした世界規模の景気後退は、失職する在日ラティーノを続出させた。

そこで日本政府は帰国支援事業（2009年4月施行）を打ち出し、帰国旅費を工面できない在日ラティーノに対して、ラテンアメリカまでの旅費の支給を決定した。失職して貧困にあえぐ在日ラティーノを救済する措置のように見える政策であるが、「日系人の身分に基づく在留資格での再入国は認めない」との条件があるため、実際は「日本からの追い出し事業」と言うべき非人道的な政策であった。

在日ラティーノに関する法や彼らを取り巻く環境の整備は、常に日本の産業を維持することを目的としてなされてきた。

長期的ビジョンのない場当たりの政策の弊害は、在日ラティーノの子ども世代にも降りかかり、彼らの教育環境は未整備の状態では放置され続けている。

日本に存在するブラジル人学校の大半は、学校教育法によって認可されていない無認可校であり、そこで学んでも日本の学校教育を受けたとは認められない。つまり、日本での高等教育機関への進学は断たれる。

一方、公立小中学校などでは、在日ラティーノの子どもの多さにもかかわらず、彼らを受け入れる環境は整っていない<sup>11</sup>。コメント9の回答者が、「母は日本語以外ほとんど話せません。そんな母が外国籍の子供たちを教えているのは、母の代わりになるような正規の日本語教員がいないからだそうです」と報告するように、ポルトガル語やスペイン語を駆使して教育を実践できる教員の絶対数が少なすぎる。多くの場合、外国人教育の専門的な知識や技能を持たない教員がその任務についたり、ポルトガル語やスペイン語を使える人物が、非常勤として雇われ、あるいはボランティアとして協力することで、その場しのぎ的に在日ラティーノの子どもたちの教育支援を行っている。

さらに、外国人の子どもたちの教育を担当するポジションは、いわゆる「窓際」な仕事として日本の教員たちから認識されがちであることも報告されている（太田 56）。

在日ラティーノの未来を考えると、救いとなるのは、子ども、あるいは青年時代に彼らと直接的な接点や交流を持った日本人が、彼らのことをより具体的に理解し、彼らとの交流を「良き思い出」として語っている点であろう。

日本人と在日ラティーノの貴重な交流の場である教育機関において、両者が良好な関係を築くことができ、相互理解を深めることで「良き思い出」を作り、その思いを抱いたまま成長できるのであれば、今後、在日ラティーノを取り巻く社会環境が好転することが期待できる。

そのためには、マスメディアの報道姿勢を再考する必要がある。現在の報道は、在日ラティーノの負のステレオイメージを強調しすぎている。最後のコメント回答者（コメント40）も「そのニュースで私の住んでいた地域でラテンアメリカに対するイメージがすごく悪くなってしまった」と報告しているが、マスメディアの報道は、日本人の不安感を無用に煽りすぎているように思えてならない。

もちろん、在日ラティーノ側からの積極的な情報発信も必要不可欠であり、日本のメディアもそれを受容するための努力を実践することが求められてゆくだろう。

在日ラティーノの受け入れについて語られる際、しばしば日本の地域社会からのアプローチの少なさが指摘されるが、在日ラティーノに対する負のステレオイメージが先行した現状では、日本人の側からの積極的なアプローチが増大するとは考えにくい。やはり、まずは在日ラティーノと日本人の双方が、互いに子ども時代から「良き思い出」を多く作りだすところから始める必要があるだろう。

そのように考えると、在日ラティーノが抱える問題解決のために、日本人と彼らが濃密に接触する場である小中高校、さらに近年では大学をも含めた教育機関が果たす役割はきわめて大きい。

大学においては、在日ラティーノに関する調査研究を実践し、そこで明らかになった事実を学生に教育していくことが必要である。在日ラティーノが置かれた状況を理解する日本人が増えることで、両者の相互理解が促進されるだろう。

もちろん、優秀な在日ラティーノを学生として受け入れ、彼らの知識や経験を生かす場を提供する準備も整える必要がある。

また、ポルトガル語やスペイン語で子どもの教育、特に日本語の教育を実践できる人材の育成を進める必要もある。もちろん、在日ラティーノをよく理解するためには、言葉だけではなく、彼らの思考や生活の様式、さらにはラテンアメリカ各国の実情についても、精通した人材を育成することが求められる。

在日ラティーノの子どもたちを教育するための専門的な知識や技術を持った教員が増え、彼らが誇りを持って働くことのできる環境を整えることが、在日ラティーノ、さらには日本人にとっても、早急に実現されなければならない課題である。

#### 注

- 1 ラティーノの来日急増は、バブル景気（1980年代後半から1990年代初め頃）に伴う労働者不足と、その解消を目的とした入管法（出入国管理および難民認定法）の改定（1989年12月改定、1990年6月1日施行）に端を発する。なお、本稿では日本に在住するラテンアメリカ出身者とその子どもを在日ラティーノと表記する。ラティーノは、ラテンアメリカ人を意味するスペイン語（latinoamericano）やポルトガル語（latino-americano）に由来する。
- 2 法務省入国管理局が発行する『在留外国人統計』、及び法務省のホームページ（[http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei\\_ichiran\\_touroku.html](http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_touroku.html)）の「登録外国人統計統計表」のデータに基づいて筆者が作成した。
- 3 アンケートでは、「在日ラティーノ」より一般的な「ラテンアメリカ出身者」や「南米出身者」という呼称を用いた。
- 4 「顔の見えない定住化」の生じるプロセスについては、『顔の見えない定住化 ―日系ブラジル人と国家・市場・移民ネットワーク』に詳しい。同書では日系ブラジル人の「顔の見えない定住化」の要因は、彼らの雇用形態にあると説く（梶田ほか 72-74）。武田は、日本に暮らすブラジル、フィリピン、中国、韓国・朝鮮出身者の在留資格を比較し、ブラジル出身者の定住化傾向が突出して高いこと、彼らが「単純就労」の資格で定住化していることを指摘している（武田 116-117）。

本間は「日本に定住を希望する南米からの日系人は三割にのぼる」と報告している（本間 182）。

- 5 「日本に暮らすラテンアメリカ出身者（あるいは南米出身者）についてのアンケート」と題したアンケートを、2006年度から2010年度までの5年間で実施した。回答者は、筆者が授業を担当した関西外国語大学及び短期大学部の学生、さらには常磐会学園大学、梅花女子大学、京都産業大学の学生で、ほぼ全員が10代後半から20代前半である。なるべく先入観のない回答を得るため、在日ラティーノに関する知識を授業で紹介しない段階でアンケートを実施した。アンケート回答者の総数は955人（2006年279人、2007年350人、2008年148人、2009年45人、2010年134人）。また、2005年までのアンケート結果は、「日本人が抱く在日南米人のイメージ」として報告した。
- 6 年度別に見ると、「いる（または、いた）」と回答した者は、2006年度12.5%（279人中35人）、2007年度15.4%（350人中54人）、2008年度14.9%（148人中22人）、2009年度26.7%（45人中12人）、2010年度21.1%（133人中28人）であった。
- 7 回答者、及びコメント中に登場する人物が特定されないよう、コメントの情報は年度のみ記す。
- 8 株式会社 IPC WORLD が、日本で発行（週刊）していた紙ベースのポルトガル語新聞（1991年創刊）とスペイン語新聞（1994年創刊）は、2010年10月をもって休刊した。
- 9 在日ラティーノの情報ネットワークと日本の情報ネットワークの乖離については、山森の「中南米から来日したデカセギ労働者の動向と情報ネットワーク」を参照。
- 10 在日ラティーノとの交流場所として明確に小中高校・大学が記入されている回答のみを集計した。
- 11 文部科学省の統計資料「母語別児童生徒数」によると、小中高校、および中等教育学校、高等教育学校における母語別児童生徒数（平成20年度）は、ポルトガル語11,386人、中国語5,831人、スペイン語3,634人、その他の言語7,724人。

#### 参考文献

イシ、アンジェロほか「異郷に生きる ―アウェイの戦い」『現代思想 ―特集 隣の外

- 国人 異郷に生きる』 Vol.35-7 青土社 2007年 pp.42-65。
- 太田晴雄『ニューカマーの子どもと日本の学校』国際書院 2000年。
- 梶田孝道、丹野清人、樋口直人 『顔の見えない定住化 一日系ブラジル人と国家・市場・移民ネットワーク』 名古屋大学出版会 2005年。
- 川村, リリ 『日本社会とブラジル移民 ー新しい文化の創造をめざして』 明石書店 2000年。
- 武田里子 「定住化する外国人のライフコースと課題」『多民族化社会・日本 ー〈多文化共生〉の社会的リアリティを問い直す』 渡戸一郎ほか編著 明石書店 2010年 pp.107-129。
- 法務省入国管理局『在留外国人統計』平成元年-22年版。
- 法務省HP [http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei\\_ichiran\\_touroku.html](http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_touroku.html) 「登録外国人統計統計表」。
- 本間圭一 『南米日系人の光と影 ーデカセギから見たニッポン』 随想舎 1998年。
- 文部科学省 HP <http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001056033> 「母語別児童生徒数」。
- 山森靖人 「中南米から来日したデカセギ労働者の動向と情報ネットワーク」『人権教育思想研究』第6号 関西外国語大学人権教育思想研究所 2003年 pp.14-38。
- 「日本人が抱く在日南米人のイメージ」『常磐会学園大学研究紀要』第7号 常磐会学園大学 2007年 pp.149-160。
- Tajima, Hisatoshi. "La otra cara del interrelacionamiento socio-cultural: crimen, delincuencia y fricción en el proceso de integración del nikkei dekasegui brasileño a la sociedad japonesa" *Emigración latinoamericana: Comparación interregional entre América del Norte, Europa y Japón*. Mutsuo Yamada (organizador). Japan Center for Area Studies, National Museum of Ethnology. 2003. 491-519.